



六甲山緑化100周年記念
六甲山の100年 そしてこれからの100年

目次

p.2 — 巻頭言

p.5 — I はじめに

p.7 — II 六甲山のあゆみ

p.8 — 1 明治以前の六甲山地

p.10 — 2 緑の回復への第一歩～明治時代～

居留外国人による六甲山上開発

砂防植林のはじまり

再度山での植林事業のはじまり

p.20 — 3 山上でのレクリエーション利用の発展と
繰り返される災害

市民による背山登山の隆盛

六甲山の観光開発

災害

植林の継続

p.28 — 4 戦後復興と緑化

観光の復興と国立公園編入

市民による緑化活動

緑化の継承

永久植生保存地

現在の六甲山

p.44 — 5 これからの六甲山の100年

市民懇話会の提言

質の高い森林をめざして

市民の参画と協働

六甲山系グリーンベルト

p.48 — 6 関連年表

p.53 — III 六甲山緑化100周年記念事業報告

市民懇話会

記念展「六甲山これからの100年」

六甲山緑化&日本ゴルフ発祥百周年記念ゴルフ大会

記念フォーラム「六甲山の自生植物を考える」

記念フォーラム「六甲山これからの100年」

写真展

記念植樹

私が描く「これからの六甲山100年」

p.61 — IV おわりに

1 明治以前の六甲山地

古代、浪速の津から見て大阪湾の対岸に当たる西宮・神戸方面を人々は「むこう」と呼び、それに漢字が当てられて「武庫」や「六甲（むこう）」と表記され、後者が「ろっこう」と読まれるようになったという。当時、瀬戸内海は大陸文化伝来の交通路だった。急峻な六甲山地は古くから山岳修行の霊地だったが、伝来した仏教とも結びつき、山岳寺院が建てられていった。奈良時代以前から行場だった摩耶山や再度山に、平安初期に唐から大輪田泊に帰った空海が天上寺や大龍寺を建てたと伝説する。

寿永3年（1184年）の一ノ谷の戦いに際して『平家物語』は「北の山ぎはより南の遠浅まで、大木を切って逆も木に曳き、大石を重ね上げ…」と平家の陣を描いている。古くから寺院や城砦の資材を供給した六甲山麓は中世にはたびたび戦に巻き込まれた。南北朝時代には元弘3年（1333年）の摩耶山合戦や建武3年（1336年）の湊川の戦い、室町後期には応仁の乱にまつわる文明元年（1469年）の兵庫焼き討ちや戦国時代の天正8年（1580年）の花隈合戦があった。その間に多々部城や滝山城、越水城や鷹尾城、松岡城や御影城、兵庫城が築かれた。戦いやその後の復興の度に、樹木の伐採や土地の改変、放火や石材採取が行われた。豊臣秀吉の大阪城の時の石切りの跡や搬出途中で放棄された巨大な石材が、今も東六甲にたくさん残っている。六甲の荒廃はこのような中世以来の人為のせいだとする説もある。

近世になると、山麓の人々が山中の谷奥に溜め池を築き、

牛の飼料の草や屋根に葺く萱、燃料の薪や土壁などのさまざまな生活の資材を求めて六甲山地に入った。山中の急な谷川の水力は、早くから水車産業を育んだ。水車は江戸時代の初めから菜種油しぼりに使われ、やがて製粉や精米に利用されて、素麺や灘の生一本の生産を発展させた。断層崖に露出していた花崗岩は上質の石材で、積み出し港の地名から御影石の名で広く知られる物産となった。断層に沿って湧き出す温泉も有馬や平野で古くから利用されてきた。

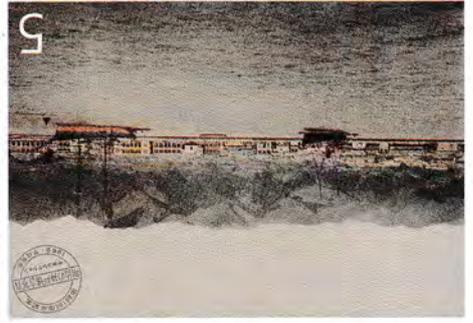
近世のこのような人々の、柴や草を刈り樹根まで採取するような過剰な山地利用に自然の回復が追いつかなかった状況を、『山田村郷土史』や『住吉村誌』などが記している。人の入山によって引き起こされる山火事も六甲名物といわれるほどで、しばしば広い山林を焼失させた。このようにして荒廃した山々は大雨のたびに土砂を流出させ、山麓には流れ出した土砂がたい積して扇状地を作り、川口には砂州が形成されていった。

幕末・開港のころに描かれた神戸の背山は、樹木もまばらな荒れ果てた姿である。明治時代、神戸に入港した船の上から眺めると六甲の荒れた山頂部の照り返しが、雪が積もっているように見えたとも言われている。また、再度山の北方に砂漠と見まがう荒れ地があったなどというのも、このような過剰な山地利用の歴史の結果だったわけである。

（園田学園女子大学教授・田辺真人 記）

- 1 神護景雲2年（768年）創建と伝えられる再度山大龍寺の山門
- 2 縄文～弥生時代の六甲山（平内安彦・画）
- 3 戦国時代（中世）の六甲山（平内安彦・画）
- 4 江戸時代の六甲山（平内安彦・画）
- 5 明治中期頃、神戸港海上から見た六甲山
- 6 神戸港開港当日の六甲山（イラストレイテッド・ロンドン・ニュース／神戸市立博物館蔵）





2 緑の回復～六甲山緑化のはじまり

居留外国人による六甲山上開発

慶応3年（1867年）12月に神戸が開港し、東は東遊園地の西の筋から西は鯉川筋まで、北は三宮神社の南の筋「西国街道」に囲まれた区域に外国人居留地が設けられ、多くの欧米人が居住して、その後の神戸の発展に大きな影響を与えた。そのひとり英国出身のA.H.グルーム（Arthur Hesketh Groom）は、グラバー商会の出張員として明治元年（1868年）に来神して宮崎直と結婚、居留地で茶の貿易を営んだ。陽気で世話好きだった彼は居留外国人社会の中心人物の一人だった。明治32年（1899年）に居留地が返還される以前の明治28年（1895年）3月に長男名義で六甲山上の都賀野村外3ヶ村の所有地を納涼遊園場敷地として賃貸する契約を結んだ。そして6月には三国池池畔に山

荘を建てて六甲山をレクリエーションの場として利用することの先鞭をつけた。その後も彼の影響によって山上の山荘は数を増していった。明治38年（1905年）に阪神電車が開通して交通が便利になり、山上の利用がすすみ、明治43年（1910年）7月の朝日新聞によると日本人12戸、イギリス人28戸、フランス人2戸、ドイツ人9戸、アメリカ人4戸、ベルギー人1戸の計56軒の山荘があった。

当時は登山道も十分ではなかった六甲山上に登るために彼らは私財を投じて約1.8m幅の登山道も整備した。明治34年（1901年）には4ホールゴルフ場を開拓したが、このゴルフ場が明治36年（1903年）までに9ホールに拡張整備されてわが国最初の公式ゴルフ場として認定された現在の「神戸ゴルフ倶楽部」である。

当時山上への交通手段としては特製の駕籠^{かご}や馬が利用さ



- 1 グルームの山荘は、六甲山上に建てられた最初の民家といわれている（平成14年10月撮影）
- 2 日露戦争で旅順が陥落したとき、グルーム家で開かれた祝宴の芝居
- 3 A・H・グルーム
- 4 現在のグルーム山荘「百一」の内部
- 5 六甲山上三国池（池の左手にグルームの山荘があった）
- 6 グルーム夫人・宮崎直
- 7 現在の神戸ゴルフ倶楽部ハウス全景

- 8 明治時代の神戸ゴルフ倶楽部
- 9 唐櫃村や住吉村などの子供たちがアルバイトでキャディをしていた。その中から日本初のプロゴルファーも誕生した
- 10 リタ・クラーク嬢の打球練習
- 11 明治時代～昭和初期は駕籠で登山をしていた
- 12 横文字で書かれたハイキングコース名 [資料＝大西雄一]

れていた。当初、駕籠は五毛と東海道線住吉駅から出発していたが、その後阪神電車の開通によって新在家駅からは駕籠、大石駅からは駕籠と馬が出るようになり、大正9年（1920年）7月に開通した阪急電車の六甲駅では週末になると幾十という駕籠が客待ちしていたといわれている。これらの駕籠や馬の利用は昭和初期まで続いたという。

積雪や濃霧の悪天候のために冬季閉鎖されるゴルフ場のシーズンオフを利用したレクリエーションとして登山活動が盛んに行なわれるようになった。登山活動はH.E. ドント（H.E. Dahnt）やJ.P. ワーレン（J.P. Warren）などによって明治37年（1904年）頃に設立された登山団体Ancient Order of Mountain Goats（後にThe Mountain Goats of Kobeなどと改称、以下MGKと表記する）が中心となって、おもに週末を利用しておこなわれた。その機関紙「INAKA」

から、その活動の様子が分かる。六甲各地に残るアゴニー坂やアイスロードなど欧風の地名はその当時の名残りである。

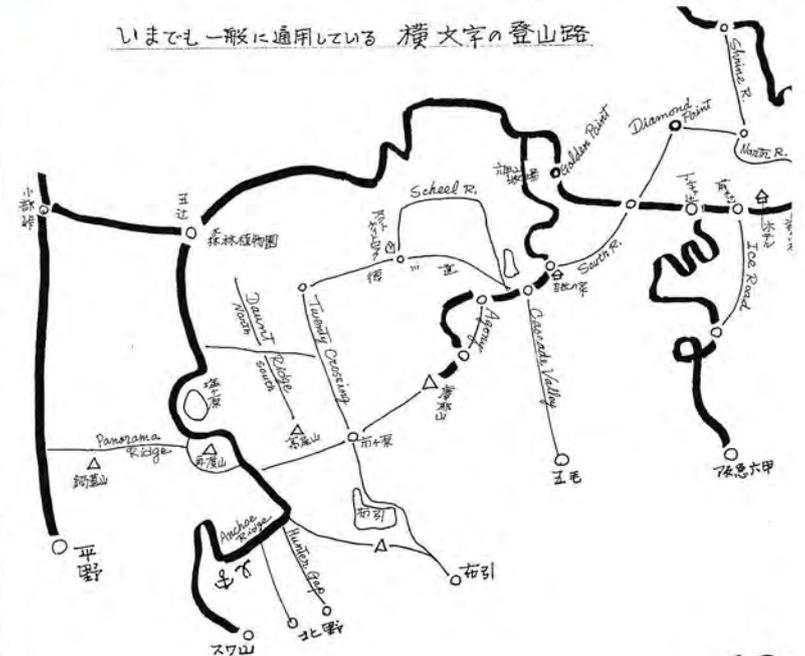
このように居留外国人や彼らと交流のあった日本人は、山上を利用して「きのこ狩り」「アイススケート」東遊園地から摩耶山へのクロスカンツリーなど様々なレクリエーションを楽しんでいた。

一方、グループは私費を投じて植林や登山道の整備を行ない、兵庫県の服部知事などに六甲山地の砂防や植林の必要を説いていたといわれている。

彼の娘である岸りうは、後に『父は多趣味で、水泳、ボート、登山、ゴルフ、絵を描くこと、芝居などもしましたが、シューティングも大変好きでした。』しかし、妻に殺生することをやめるよう諭され、五男の誕生を機に狩猟で殺生したことを悔い、『そこでこれまでの罪のおわびのし



いまでも一般に通用している 横文字の登山路



12

るしに六甲山を開いて、少しでも神戸の人々の役に立ちたいと決心しました。』と記し、『いわば、母の日本的というか仏教的な信仰が、狩猟好きのイギリス人の父の心を動かし、六甲開山の動機となったと申せましょう。』と述べている。

そのようなグループは、六甲山村長とも呼ばれ、明治45年（1912年）には山上に彼の功績をたたえた「六甲山開祖之碑」が除幕された。この顕彰碑は、昭和17年（1942年）の第二次大戦中に外国人のものだというだけの理由で破壊された。今は、昭和30年（1955年）に再建された「六甲山の碑」とグループの胸像があり、毎夏、多数の市民が参加して六甲山の夏山の安全を願う「グループ祭」が行なわれている。

『本当に父は、日本を愛し、神戸を愛し、六甲山を愛しと

おした人でした。』とりうが語っているグループは『墓も外国人墓地にせず、宮崎家先祖代々の墓に骨を埋めて呉れ…』との遺言に従い、宮崎家の墓所で永遠の眠りにについている。

砂防植林のはじまり

神戸港開港と居留地の設置により、近代都市として歩みはじめた神戸の街の人口は増加の一途をたどり、開港当時2万数千人と推定された人口は市制施行の明治22年（1889年）には13万4千人余と20年間で約6倍に急増した。急激な人口増加によって井戸水を利用していた生活用水の水質の悪化がすすみ、明治10年代になると毎夏コレラ、赤痢などの伝染病が流行して多数の市民が罹病するようになった。このような衛生環境を改善するために上水道の整備が



- 1 秋のきのこ狩りを楽しむ人々
- 2 「六甲開祖之碑」の除幕式（明治45年／1912年）
- 3 新池でのスケート（当時は30cm以上の氷がはった）
- 4 スキーを楽しむ人々（昭和初期）
- 5 馬を引いて山上を歩く人
- 6 「六甲開祖之碑」除幕式に集まった人々

- 7 The Mountain Goats of Kobeの機関誌「INAKA」
- 8 布引貯水池（平成13年11月）
- 9 神戸の水源地として生田川上流に造られた布引貯水池の堰堤
- 10 明治36年の観艦式後、つくられた錨山
- 11 現在の錨山

必要となり、明治26年（1893年）になって公営水道が敷設されることが決まった。そしてその水源の一つとして明治33年（1900年）に生田川上流に布引貯水池が完成した。

しかし、貯水池の集水域である生田川上流域の山地は激しく荒廃しており、大雨のたびに貯水池に泥流が流入する状況だった。貯水池の上流には砂防堰堤や締め切り堤が設けられて泥流は放流するようにはなっていたが、貯水池へ流入する土砂を防ぐために泥流発生の監視は怠れず、本格的な砂防工事の必要に迫られていた。

貯水池への土砂の流入を防止するために水源域での砂防に植林が必要なことは認識されていた。しかし貯水池の建設計画には組み込まれていなかったため、貯水池の水源を保全するための砂防植林を急ぐ必要に迫られた。

ここで当時の六甲山地の荒廃の様子を振り返って見よう。

明治14年（1881年）4月に高知から船で上京の途上神戸に上陸した、わが国の植物学の父ともたたえられる牧野富太郎は、海上から六甲の山々を眺め『私は瀬戸内海の海上から六甲の禿山を見てびっくりした。はじめは雪が積もっているのかと思った。』と露出した白い花崗岩の山肌の様子を随想「東京への初旅」のなかに書き残している。

また、明治16年（1883年）に兵庫県を視察した地方巡察使の横村正直は、その報告書「兵庫県管内巡察記」に六甲山地から土砂が流出して山は骨と皮だけになっていて、その骨と皮も崩れつつあると書き、さらに河川氾濫の恐れにも触れて砂防植林の必要を述べている。

このように荒廃してゆく山地の様子を明治32年（1899年）に植林に先立って布引貯水池の水源域を視察した本多静六は、いわゆる赤松亡国論（「我国地力ノ衰弱ト赤松」）



スキー・スケート

六甲山ではゴルフ場をゲレンデとしたスキーや、山上に点在する池を利用してアイス・スケートが行なわれていた。

●スキー

明治35年（1905年）に青森県八甲田山で発生した雪中行軍の大量遭難の後、神戸在住のノルウェー総領事P・オッテセンが本国からスキーを取り寄せて六甲山で滑ってみせたのが、わが国でスキーが使用された最初といわれている。大正4年（1915年）2月には、「神戸徒歩会」が「六甲山のスキー遊び」を開催。

●スケート

六甲山上に点在する池では、明治30年代にはすでに、主に外国人によりアイス・スケートが楽しまれていた。

錨山

明治36年（1903年）4月10日に神戸港沖観艦式が行なわれたとき、学童・市民15000人が日章旗を持って錨をかたちづくり歓迎したことを記念して、同年から翌年にかけてマツの木で錨のかたちを作った。今では錨のマークと市章が電飾されている。



のなかで、森林は乱伐による地力の衰えとともに第一期、第二期と悪化してゆくとして、『荒れ果てて丸裸になったあの瀬戸内地方の山々、殊に、早くから開けた地で濫伐暴採も早くから行われてきた神戸岡山付近の諸山の現在は、もはや第二期の変化も終わって第三期の惨状を示すものが多い。あの再度山や鉄柵山の松は百数十年にもなるのに、人の背、腕の太さほどにもならず、地面はほとんど露出して水源全く涸れ、降雨のたびに土砂を流出し、(中略)河床ますます高くなり洪水旱魃の害は年々ひどくなるばかり』と述べている。

明治35年(1902年)1月に本多の植林に先立つ現地調査に同行したドイツ人の招聘教師ヘフェレ(Karl Hefele)は、『水道の水源としてこれほど荒廃した場所は世界にも類がない。博覧会にでも出展してはどうか』と皮肉ったと伝え

られている。

明治35年(1902年)11月に布引貯水池の集水域である再度山付近で植林事業が開始された直後の様子を「神戸又新日報」は、『(前略)山の状況真に寒心すべきものあり。再度山の後方一帯の連山は全面赤砂にして、一草一木の見るべきものなく、岩石骨を露にして諸処に黒色を点綴するのみ、宛然一小沙漠なりき。沙漠は外国にありと聞けるに神戸市の直ぐ後方に之を見んとは思ひも余らざりしなり。(中略)永遠の長計なき市民と当局者が、自らその山を繕にせるなり。濫伐の弊恐るべきかな(後略)』と記している。

このほか当時の六甲山の荒廃の様子を記述した文献にはこと欠かない。

六甲山地の荒廃地の分布については、神戸大学教育研究



センターの松下まり子が、明治20年（1887年）の参謀本部陸軍部測量局の地形図から当時の植生を再現した図面をみるとよく分かる。村落に近接する部分や再度山、摩耶山など寺院の周辺を除く六甲山の山上部や南斜面の大部分が荒廃していた様子が表されている。これを江戸時代末期の神戸を描いた「武庫連山海陸古覽」などの絵図や明治時代に撮影された写真や記述などと重ね合わせると当時の背山の様子がある程度想像できる。

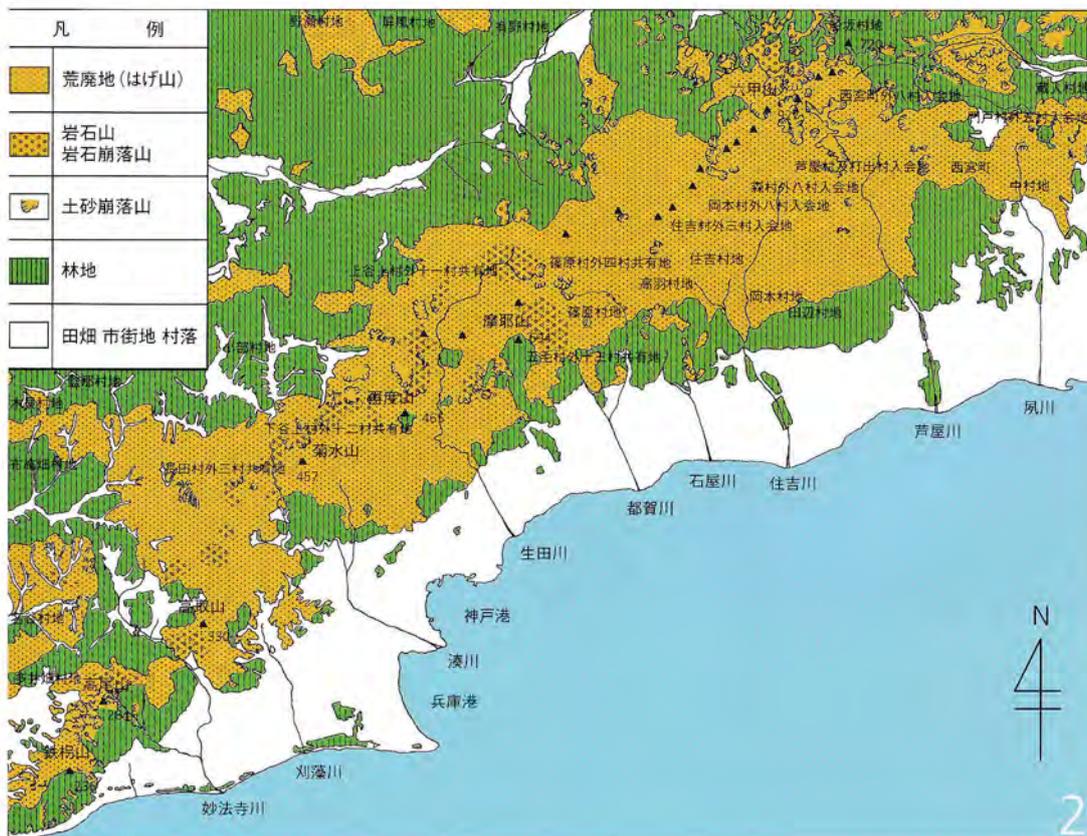
地方巡察使榎村正直が指摘した河川氾濫の恐れは明治25年（1892年）に現実の災害となり、この災害で被害の大きかった逆瀬川上流で土砂災害を防止するための防災工事が明治28年（1895年）に兵庫県により施工された。

再度山での植林事業のはじまり

明治新政府成立から約30年が経ち、明治29年（1896年）に河川法、明治30年（1897年）には森林法、砂防法と国土保全に必要な法整備がすすみ、明治22年（1889年）に市制を施行した神戸市の上水道の水源域を保全するために砂防植林を実施する環境が整ってきた。

明治32年（1899年）7月に奈良県で大日本山林会大会が開かれたのを機に勸業委員や市職員が吉野林業の視察を行った。「茲に初めて植林の議を起こしたるなり」と大日本山林会報第287号に記されている。そこで神戸市は、当時気鋭の造林学者であった東京帝国大学農科大学教授の本多静六を水源域の視察に招き、同年9月1日に商業会議所に500名を集めて水源涵養に関する講話を行ない、これによ

- 1 空から見た六甲山系 [提供=六甲砂防工事事務所]
- 2 明治20年（1887年）の参謀本部陸軍部測量局の地形図から再現した六甲の荒廃のようす [資料提供=松下まり子]



って造林の必要なことがよく知られるようになった。

近畿地方では滋賀県の田上山で早くから砂防工事が行なわれていた。明治35年（1902年）2月に神戸市職員がこの田上山の砂防工事を視察し、明治34年度の予算から捻出した経費で荒廃が激しい再度山修法ヶ原において明治35年2月18日から3月18日にかけて約0.68haの試験植栽を実施した。この試験植栽では、積苗工約1,900mと谷止工5カ所を施工してクロマツとヤシャブシをそれぞれ10,000本植栽し、良好な結果を得た。

一方、明治33年（1900年）10月、兵庫県に生田川上流域の砂防工事の施工を申請した。申請していたこの地域が明治36年（1903年）に砂防指定地となり、国庫補助を受けて同年度から13ヶ年計画として布引貯水池の水源域1,100haを施工区域として実施されることになった。この

植林ではha当り10,000本のマツ、ヤシャブシなどが植えられた。

一方、神戸市域で将来的に森林として造林の必要な場所の調査は、県から派遣された林業巡回教師の林五八と測量手伊藤種次によって明治34年（1901年）4月に調査に着手し、明治35年（1902年）3月に終了した。市会は明治35年度予算で初めて造林費を可決して神戸区所有の山林（現在は北区内の神戸市有林）45haを対象に造林を行うこととして区会に土地の使用を求めた。区会は明治35年度から20年間は無償で、55年度以降は収益の7割を市、3割を区の所得とする条件で土地の使用を認めた。これにより愛媛県新居郡から11人の造林経験のある作業員が到着して、明治35年（1902年）11月13日に当時の坪野神戸市長の激励を受けて植林（地拵^{ぢごしら}え）作業に着手した。これが荒廃し



- 1 砂防植林が始まった明治36年（1903年）の再度山
- 2 明治36年、植林のために山に入る人々
- 3 施工から一年後の再度山
- 4 明治41年（1908年）、施工から5年後の再度山
- 5 大正2年（1913年）、施工から10年後の再度山
- 6 現在の再度山周辺

- 7 本多静六、大学教授時代（大正10年頃）
- 8 明治期の植林一覧表

た六甲山に緑を回復する計画的な大規模な植林のはじまりとされている。

また、明治36年度以降の樹種選定や造林案の策定を明治36年（1903年）6月に本多静六に委嘱し、本多の推薦で京都府立農林学校教諭の斉藤勝蔵を嘱託技師として同年9月に案が調製された。これによって36年度から39年度に至る約600haの植林が開始された。この造林で特筆されるのはその植栽樹種の多さで20数種類の樹木が植栽された。これは、クロマツなどの砂防樹を主体としながらも特用樹（木鱗^{ちくろう}を採取するハゼノキや樟腦^{しょうのう}を採取するクスノキなど）を混植することで森林経営の安定に留意したことや神戸の大都市としての発展を見越した風致施業への布石がなされたのではないかと推測されている。

この時期の植林について、『口一里山を主としたる部落

有山林約540町歩（ha）に対する明治35年（1902年）より42年までの市営造林事業、中一里山に対しては県の砂防指定地内における明治36年（1903年）より昭和8年（1919年）までの間（中略）に砂防事業を終了したるをもってひとまずこれを中断し（後略）』と記されており、比較的成林が見込まれた口一里山で明治36～42年度に540町歩（ha）の植林を行ない、荒廃が激しい中一里山は砂防設備指定地に編入して明治36年～昭和8年まで山腹積苗工を施工したものと思われる。

この植林について、本多は阪神大水害の視察に訪れた昭和13年（1938年）10月に開かれた講演会で、『（前略）時の神戸市長坪野平太郎氏は特に不肖私に治山治水の調査設計を委嘱せられましたので、自分は当局と共に六甲山から布引の水源地一帯を調査し砂防造林案を立て、神戸商業会



本多静六

慶応2年（1866年）埼玉県に生まれる。東京山林学校（東京大学農学部の前身）卒。

ドイツに留学、財政学と林学を修めて帰国。日本最初の林学博士のひとり。東京帝国大学教授。造林学や造園学など林学関連分野の発展と指導者の育成に尺力。明治神宮の森や日比谷公園など全国各地に業績を残した。四分の一貯蓄法を实践。かなりの財をなしたが、公共に寄付。現在も奨学生を世に送り出している。昭和27年（1952年）没。

表1 明治期の植林一覧表（1943、神戸市港部局）

年次	造林箇所	面積(町)	樹種	本数
明治36	中一里山	10.2	ヒノキ、スギ、ハゲシバリなど	130,300
	口一里山	32.9	ヒノキ、スギ、マツ	302,900
	口一里山	12.7	ヒノキ、マツ	96,800
37	口一里山	115.4	ヒノキ、スギ、マツ、イチイ、カシ、クス	732,830
38	口一里山	76.8	マツ、カシ、フウ、ヒノキ、スギ、イチイ	391,250
	平野町平野谷	58.4	アカマツ、クロマツ、ヒノキなど	290,500
39	平野町天王谷	47.6	アカマツ、クス、クヌギなど	431,765
40	石井町ヌク谷	5.6	マツ	28,500
	中一里山	44.5	マツ、ヒノキ、スギ、カシ	198,250
	平野町天王谷	39.9	マツ、ヒノキ、スギ、カシ	190,020
41	篝合町地藏谷	15.0	アカマツ、ヒノキ	67,550
	中一里山	49.5	マツ、ヒノキ、スギ	222,300
	中一里山	3.6	クリ	5,500
43	中一里山	7.9	マツ、ヒノキ	29,160
	口一里山	9.2	マツ、クス、クヌギ、イチイ	40,050
44	中一里山	8.3	マツ、ヒノキ	40,300
	中一里山	7.0	マツ、ヒノキ	29,800
	中一里山	6.7	マツ、ヒノキ	28,580
45	口一里山	8.7	ヒノキ、マツ	39,000
	中一里山	5.6	マツ、ヒノキ	24,700
大正4	島原(水源地)	7.9	クス	24,069
計		573.4		3,344,124

(注) 中一里山は山田村上谷上。口一里山は神戸港地方

た六甲山に緑を回復する計画的な大規模な植林のはじまりとされている。

また、明治36年度以降の樹種選定や造林案の策定を明治36年（1903年）6月に本多静六に委嘱し、本多の推薦で京都府立農林学校教諭の斉藤勝蔵を嘱託技師として同年9月に案が調製された。これによって36年度から39年度に至る約600haの植林が開始された。この造林で特筆されるのはその植栽樹種の多さで20数種類の樹木が植栽された。これは、クロマツなどの砂防樹を主体としながらも特用樹（木蠹を採取するハゼノキや樟脳を採取するクスノキなど）を混植することで森林経営の安定に留意したことや神戸の大都市としての発展を見越した風致施業への布石がなされたのではないかと推測されている。

この時期の植林について、『口一里山を主としたる部落

有山林約540町歩（ha）に対する明治35年（1902年）より42年までの市営造林事業、中一里山に対しては県の砂防指定地内における明治36年（1903年）より昭和8年（1919年）までの間（中略）に砂防事業を終了したるをもってひとまずこれを中断し（後略）』と記されており、比較的成林が見込まれた口一里山で明治36～42年度に540町歩（ha）の植林を行ない、荒廃が激しい中一里山は砂防設備指定地に編入して明治36年～昭和8年まで山腹積苗工を施工したと思われる。

この植林について、本多は阪神大水害の視察に訪れた昭和13年（1938年）10月に開かれた講演会で、『（前略）時の神戸市長坪野平太郎氏は特に不肖私に治山治水の調査設計を委嘱せられましたので、自分は当局と共に六甲山から布引の水源地一帯を調査し砂防造林案を立て、神戸商業会



本多静六

慶応2年（1866年）埼玉県に生まれる。東京山林学校（東京大学農学部の前身）卒。

ドイツに留学、財政学と林学を修めて帰国。日本最初の林学博士のひとり。東京帝国大学教授。造林学や造園学など林学関連分野の発展と指導者の育成に尺力。明治神宮の森や日比谷公園など全国各地に業績を残した。四分の一貯蓄法を実践。かなりの財をなしたが、公共に寄付。現在も奨学生を世に送り出している。昭和27年（1952年）没。

表1 明治期の植林一覧表（1943、神戸市港都局）

年次	造林箇所	面積(町)	樹種	本数
明治36	中一里山	10.2	ヒノキ、スギ、ハゲシバリなど	130,300
	口一里山	32.9	ヒノキ、スギ、マツ	302,900
	口一里山	12.7	ヒノキ、マツ	96,800
37	口一里山	115.4	ヒノキ、スギ、マツ、イチイ、カシ、クス	732,830
38	口一里山	76.8	マツ、カシ、フウ、ヒノキ、スギ、イチイ	391,250
	平野町平野谷	58.4	アカマツ、クロマツ、ヒノキなど	290,500
39	平野町天王谷	47.6	アカマツ、クス、クヌギなど	431,765
40	石井町ヌク谷	5.6	マツ	28,500
	中一里山	44.5	マツ、ヒノキ、スギ、カシ	198,250
	平野町天王谷	39.9	マツ、ヒノキ、スギ、カシ	190,020
41	養谷町地蔵谷	15.0	アカマツ、ヒノキ	67,550
	中一里山	49.5	マツ、ヒノキ、スギ	222,300
	中一里山	3.6	クリ	5,500
43	中一里山	7.9	マツ、ヒノキ	29,160
	口一里山	9.2	マツ、クス、クヌギ、イチイ	40,050
44	中一里山	8.3	マツ、ヒノキ	40,300
	中一里山	7.0	マツ、ヒノキ	29,800
	中一里山	6.7	マツ、ヒノキ	28,580
45	口一里山	8.7	ヒノキ、マツ	39,000
	中一里山	5.6	マツ、ヒノキ	24,700
大正4	鳥原(水源林)	7.9	クス	24,069
計		573.4		3,344,124

(注)中一里山は山田村上谷上。口一里山は神戸港都地方

議所で大講演をし、明治35年度より43年度の9年間に650町歩（ha）の造林を完成しました。今日存する27年生から36年生の中大の黒松林は当時の造林に成るものであります。明治35年頃の布引水源地等は山の背が馬の背より狭く峠の両側は赤禿の崩壊急斜面で、下方の溪間は一帯の石原と沙漠であり、再度神社の森の外はほとんど森林なるものなくわずかに所々に貧弱な笠松が^{てんせい}点生せる状態であった。私は布引の水源地において之は地獄谷だと絶叫し、せっかく造林しても再び濫伐せらるるのを予防するため、この実況を写真で残そうと写しておいた写真が今尚神戸市の何処かにあるはずであります。とにかく36年前には周囲の諸山がごとごとく岩石や砂の崩壊せる地獄谷であってその底にわずか1段歩ばかりの水溜りしかなかった^{しお}鹽ヶ原が、いまや全山緑滴るばかりの美しい松林とかわり、その

もとに満々たる一大湖水を生じて、数多くの若人たちが舟遊びをしている極楽谷に成り変っていましたことは、私は当時を思い出して今昔の感に堪えず（後略）』と述べている。

この本多の指示で写されたと思われる写真をここに掲載している。[P.16-P.17参照]

昭和13年（1938年）の阪神大水害に際し、この砂防植林施工地とその他の地域での被害状況は大きく異なり、砂防植林が災害防備に果たした役割は顕著だった。

しかし、すでに当時本多の危惧した乱伐がはじまっており、『(前略) 明治35年（1902年）頃から応急手段として赤禿山にもっとも造林しやすい黒松林を仕立て、次いでその間に^{かつようじ}潤葉樹（広葉樹）を仕立て漸次第1期の潤葉樹林に導く方針であったのに、一度黒松林成立するやすなわち安



- 1 現在も再度山に残る明治時代の植林の石積工
- 2 鳥原のクスノキ植林地と樟脳づくりの風景
- 3 クスノキが生い茂った現在のようす（布引貯水地）
- 4 植林の年代を記録した『神戸区有山林全区』の一部

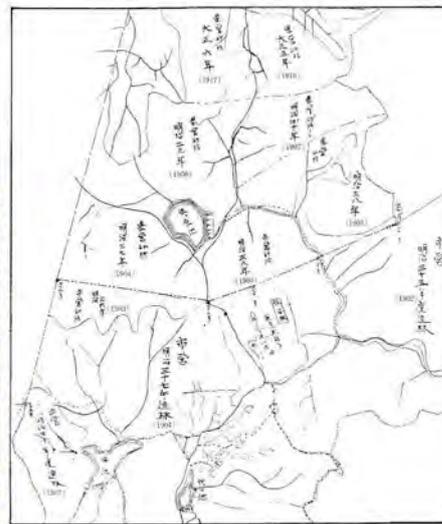
心してその一部には早くも乱伐行われ、一部には開墾が許可され、その他六甲山の大部分には連年山火事が入って焼野となり、加うるにいたるところに不完全なる観光道路等が開墾されて民衆の林内を踏み荒らすことが多くなったため遂に今回の惨害を来したたものであります。』とも述べている。

この講演において本多は、また次のようにも述べている。『なお、今回の水害に対してあるいは神戸背山の山林を開いて自動車道や遊歩道やケーブルを造ったり別荘地や遊覧地を設けたりしたのが悪いのだからこれらを一括止めさせるのが安全な治水策だという人もありますが、それは文化の後退であって今日の世に言うべき語ではありません。まことに神戸背山一帯の山岳のごときは、その位置、景勝の点からみて天然己に市の森林公園として利用すべき運命を

有するものであります。ただその利用法がよく天然の地勢、地質、傾斜、林況等に応じて安全なる方法をとるべきであったのにそれが間違っていたためである。されば道路やケーブルを造ったのが悪いのではなく、造り方が悪かったのだ。(後略)』と、このように続けた後に今日においてもなお色あせない示唆に富む背山の治水と利用についての善後策を示している。



3



4

3 山上でのレクリエーション利用の発展と繰り返される災害

市民による背山登山の隆盛

神戸では開港とともに外国人居留地が設けられたが、外国人の自由な居住と国内移動には制限が加えられていた。しかし、その制限下でもグルームのように六甲の山々を歩きまわり、日本人の名義を使って山荘を建て、レクリエーションを楽しむ外国人もいた。

この頃、外国人が六甲山上に登る主な道は今のアイスロードと、カスケードバレーと呼ばれた^{さま}杣谷を登るコースなどだったといわれている。アイスロードは明治7年頃(1874年頃)から山上に散在する30余の池から切り出した氷(を運んだ道である。登山のために一番利用されたのは、五毛まで人力車を利用して、山道に入り杣谷を登るコースで、グルームの山荘「^{ひゃくいち}百一」もこのコース沿いにある。

一方、明治30年(1897年)頃には、まだ登山道も十分に整備されていなかった六甲山が学校の遠足などにも盛んに利用されはじめていた。

このような山上への利用とともに山が街に迫った神戸では、毎朝仕事に出かける前に手ごろな山筋を登って輪投げや卓球などのレクリエーションを楽しみ、登山の回数を競う「毎朝登山」が明治半ば以降盛んに行われ、大正時代から昭和初期に最盛期を迎えた。明治以前の日本にはハイキングの習慣はなかったといわれ、神戸の背山登山も在留外国人の影響によるものと考えられている。神戸では旧市街地の背後に連なる山々をいつの頃からか「背山」と呼ぶようになった。「毎朝登山」も今日では「毎日登山」という呼び方が一般的なようだが、この登山習慣は単に背山に登るというだけではなく、それが市民生活にとけこんだもの



- 1 大正10年(1921年)頃の登山スタイル
- 2 滝の前でステッキを持って
- 3 川原にテントを張ってつづぐ直木重一郎
- 4 ロッククライミングの様子

- 5 昭和3年(1928年)頃の六甲山頂明細地図
- 6 「神戸ヒヨコ登山会」の現在の会報
- 7 塚本道之碑
- 8 「神戸草鞋会」をつくった塚本永堯(右)

になっているところに大きな特色がある。

六甲山でのレクリエーション利用が始まった頃、外国人が出勤前に朝の散歩に背山へ出かけていたのを日本人が真似て登ったのが「毎朝登山」のはじまりといわれている。当時外国人が多く登ったのは北野や山本通に居住していた関係で布引と再度だったといわれている。

現在、再度山の善助茶屋跡に「毎日登山発祥の地」の碑があるが、毎朝登山の署名所となっていた茶店などでは、紅茶とトーストといった欧風の朝食も用意されていた。このような事情を背景にはじまった背山登山は次第に盛んになり、明治末から昭和初期にかけて数多くの登山団体が生まれた。

そのなかで最初の登山団体となった神戸草鞋会^{わらじ}は、塚本永茂^{ながたか}が夫婦連れで裏山を登山していた時にMGK (The

Mountin Goats of Kobe) のワーレンが人夫を督励して登山道を整備しているのを感じて、自ら会員を募集して明治43年(1910年)に結成した登山会である。後に神戸徒步会などと名称を変えながら発展し、機関紙「ペデスツリアン」を発行していた。塚本がワーレンの登山道整備に感じて結成した登山会であったこともあって、一時機関紙の発行を中止してまでその費用を登山道の整備にあてるなど精力的に烏原貯水池から摩耶山に至る地域で延べ40kmに及ぶ登山道の整備を行なった。この塚本の功績を称える「塚本道之碑」が再度山の登山道沿いに残されている。

その後大正時代から昭和初期にかけて職域や町内会仲間が誘い合ったりして続々と登山団体が結成されたが、大正11年(1922年)に創設された「ヒヨコ登山会」や「神戸突破嶺会^{つくばね}」は今日も活発な活動を続けている。このような



5



6



8

登山団体のなかから夏休みなどには中部山岳などに出かけて本格的な登山活動を行なう団体や個人も生まれた。なかでも大正13年（1924年）に神戸徒歩会の会員であった藤木九三の主唱で結成されたRCC（Rock Climbing Club）は、岩登りや積雪期登山など近代登山を目指す登山団体としてロックガーデンなどをゲレンデとして活動をはじめた。藤木はわが国最初のロッククライミングの手引書である「岩登り術」を表したことで知られ、昭和40年（1965年）に高座の滝にその記念レリーフが設けられた。ロックガーデンではわが国近代登山の発祥の地として毎年「藤木祭」を開催してその功績がたたえられている。

大正13年（1924年）の神戸新聞は「第3回山岳競争大会」の社告を掲載しており、またRCC会員の直木重一郎ほか2人が大正14年（1925年）秋に六甲山脈大縦走を行なうな

ど、現在盛んに行なわれている六甲全山縦走などの持久力を必要とする山岳競技がすでにスポーツとして始められていた。

在神外国人の登山に端を発して登山が盛んになった六甲山は、市民による植林や登山道の整備という自主活動のもとでわが国における近代登山のメッカと呼ばれるようになった。

しかし、明治末期から大正、昭和と次第に盛んになり活発な活動を展開してきた登山団体も昭和13年（1938年）7月の阪神大水害と次第に戦時色を強める世相のもとで衰退していった。

六甲山の観光開発

阪神電車の開通後、明治末頃には登山者の便宜を図るため



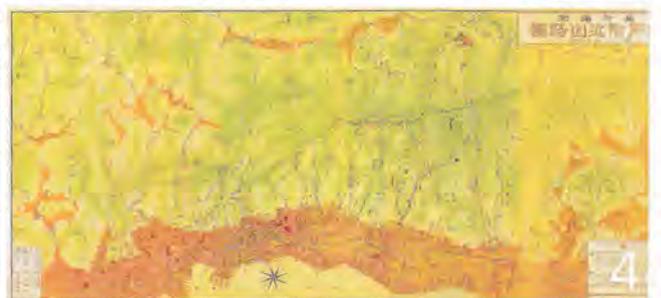
1



2



3



4

- 1 摩耶山での植物観察会（昭和16年頃）
- 2 毎日登山でラジオ体操をする人々
- 3 毎日登山発祥の地、善助茶屋跡
- 4 大正14年当時の六甲山ハイキングコース

- 5 奥摩耶ドライブウェイ（昭和30年頃）
- 6 六甲ドライブウェイを走る展望用オープンカー（昭和7年）
- 7 六甲ロープウェイの開通（昭和6年）
- 8 六甲ケーブル（昭和7年）

と阪神電鉄社員のレクリエーションにも使用するために「阪神クラブ」が六甲山上にできた。大正3年（1914年）に第一次世界大戦が勃発して帰国する在神欧米人が増加するとともに富裕層の日本人の別荘が増加し、当時電気供給事業も行っていた阪神電鉄によって山上にも電灯が灯されるようになった。

大正14年（1925年）に摩耶ケーブルが営業を開始したが、昭和2年（1927年）に、有野村から阪神電車が約250haの土地を買収したことが本格的な六甲山の観光開発の契機となった。

昭和3年（1928年）には裏六甲ドライブウェイが開通し、有馬から山上へのバスが運行を開始した。昭和4年（1929年）に表六甲ドライブウェイが開通、阪急六甲から山上へのバス運行をはじめた。

昭和5年（1930年）には神戸市に失業救済と観光施設充実のために裏山開発調査委員会が設置され、背山道路の拡充を主とする開発計画がはじまった。また、道路網の整備とともに昭和3年（1928年）に諏訪山動物園と諏訪山公園、昭和7年（1932年）鶴越遊園地、翌8年（1933年）鉢伏山、昭和11年（1936年）再度公園と公園計画が進められ、かつて生活資材を調達する場であった六甲山は観光レクリエーションの対象に変わっていった。さらに昭和6年（1931年）六甲ロープウェイが開通。翌年六甲ケーブル開通。昭和7年（1932年）山上回遊道路完成。昭和9年（1934年）東六甲縦走道路開通、六甲オリエンタルホテル開業。西六甲では昭和10年（1935年）に再度山ドライブウェイが開通し、同12年（1937年）に市バス運行開始と次々に山上の道路網が完成した。登山交通の整備とともに昭和4年



(1929年)には現在の六甲山ホテルが営業を開始し、昭和8年(1933年)六甲高山植物園開園、昭和11年(1936年)凌雲荘開業など次々と観光施設が整っていった。[P.48-P.51参照]

しかし、昭和13年(1938年)の阪神大水害による被害は甚大で道路網は寸断され、ケーブルも大きな被害を受けた。昭和初期の道路開設が被害拡大と無縁ではなかったといわれている。第二次大戦中の昭和18年(1943年)、軍用のために小部峠から摩耶山への西六甲縦走道路(明石神戸宝塚線の一部)が完成し、ほぼ今日の道路網ができあがった。

しかし、昭和19年(1944年)に入ると戦局が厳しくなり、摩耶ケーブルや六甲ロープウェーの撤去がはじまるなど六甲山から観光の灯は消えていった。

災害

六甲山の災害といえば昭和3年(1928年)に灘区高羽から芦屋川上流までの区域で500~600haを焼失するなど古来六甲名物とまでいわれた山火事があげられる。いかに山火事発生が多かったかをうかがわせる資料として大正10年(1921年)から14年(1925年)までの5年間に市内の山火事は170件、被害面積273haとの記載がある。昭和3年(1928年)の大火で住吉川上流部の「秘蔵の原始林」を消失した当時の住吉村は、翌年から焼け跡に約100haの植林や防火線の整備を行なった。その後、昭和11年(1936年)に山火事の予防と早期発見のために六甲南麓の自治体が共同で「六甲山系火防協会」を組織して巡視や稜線に設けた望楼からの監視を行ない、山火事の早期発見に努めた。ま



1 豪雨による市が原の大崩壊(昭和42年)

2・3 昭和42年災害前後の住吉川五助堰堤(左が災害前、右が災害後)

4 大雪による被害にあった石楠花山造林地(昭和61年3月)

5 兵庫区平野町天王谷東服山の山火事

6 省線(現在のJR)住吉駅付近の濁流(昭和13年)

7 布引付近の後始末(昭和13年)

8 復興に努める楠町(昭和13年)

9 大丸前の浸水(昭和13年)

た、明治期の植林当時から山火事の延焼を防ぐために幅約4~8mの防火線が山稜に設置されていたが、さらに防火線の両側に幅7~8mの帯状にヤマモモ、サンゴジュ、ユズリハ、マテバシイなどを、防火樹林帯として植栽した。これは今でも再度谷西尾根などによく残されている。

山麓に甚大な被害をもたらす土砂災害については、古くは日本書紀に白雉3年（652年）大雨の記載があるが、古くなるほど文献も乏しく実際にどれほどの被害をもたらした災害がどれほどの頻度で発生したかは明らかではない。しかし、延暦18年（799年）から明治元年（1868年）までの1069年間に文献に現れる大きな災害は38回とされ、六甲山系での土砂災害は約30年の周期で繰り返されるとされている。豪雨のたびに災害を繰り返してきた六甲山では、明治25年（1892年）の水害を機に逆瀬川や生田川の

上流で砂防や治山工事が行なわれ、これが六甲山での近代砂防のはじまりとされている。しかし、砂防や治山事業が本格的にすすめられるのは昭和13年（1938年）7月の阪神大水害を機にはじめられた国直轄の事業を待たなければならなかった。

平成7年（1995年）1月17日午前5時46分に発生した地震は、神戸市を中心に多数の犠牲者を出す大きな被害をもたらした「阪神淡路大震災」と名づけられた。六甲山系では約770箇所の崩壊地が確認され、その後5月の季節はずれの大雨と梅雨によってさらに拡大した。

植林の継続

神戸市は昭和9年（1934年）の室戸台風と翌10年（1935年）の大雨で被害を受けたことを機に国土保全、風致、観



た、明治期の植林当時から山火事の延焼を防ぐために幅約4~8mの防火線が山稜に設置されていたが、さらに防火線の両側に幅7~8mの帯状にヤマモモ、サンゴジュ、ユズリハ、マテバシイなどを、防火樹林帯として植栽した。これは今でも再度谷西尾根などによく残されている。

山麓に甚大な被害をもたらす土砂災害については、古くは日本書紀に^{はくち}白雉3年(652年)大雨の記載があるが、古くなるほど文献も乏しく実際にどれほどの被害をもたらした災害がどれほどの頻度で発生したかは明らかではない。しかし、延暦18年(799年)から明治元年(1868年)までの1069年間に文献に現れる大きな災害は38回とされ、六甲山系での土砂災害は約30年の周期で繰り返されるとされている。豪雨のたびに災害を繰り返してきた六甲山では、明治25年(1892年)の水害を機に逆瀬川や生田川の

上流で砂防や治山工事が行なわれ、これが六甲山での近代砂防のはじまりとされている。しかし、砂防や治山事業が本格的にすすめられるのは昭和13年(1938年)7月の阪神大水害を機にはじめられた国直轄の事業を待たなければならなかった。

平成7年(1995年)1月17日午前5時46分に発生した地震は、神戸市を中心に多数の犠牲者を出す大きな被害をもたらした「阪神淡路大震災」と名づけられた。六甲山系では約770箇所の崩壊地が確認され、その後5月の季節はずれの大雨と梅雨によってさらに拡大した。

植林の継続

神戸市は昭和9年(1934年)の室戸台風と翌10年(1935年)の大雨で被害を受けたことを機に国土保全、風致、観



光の検討を行なうために背山の測量や森林調査を実施した。当時、神戸市では明治末期以来の500ha余りの山林経営を行っていたが、昭和12年（1937年）、13年（1938年）に旧部落有林などが神戸市に移譲され、1520ha余りの山林が経営の対象となった。これに対応するために組織の改編などを行なって経営の万全を期そうとしていたが、その矢先、昭和13年（1938年）7月に阪神大水害に見舞われ、その対応に追われることになった。さらに中国大陸での戦争が太平洋戦争へと拡大して戦時体制が敷かれ、森林生産物の統制なども強化されるなかで新たな森林経営の方針が決定された。

神戸市が昭和18年（1943年）に編纂した「^{へんさん}施業^{あん}按説明書」によると『明治期に植栽された森林の状況について、谷部にはスギ、ヒノキ、尾根部はほとんどマツの単純林で

その8割がクロマツである。植栽後、下刈りは行なったが昭和13年（1938年）まで除伐、間伐を行なっていなかったため植栽後20年を過ぎると樹木の成長力がおとろえている。それに対して自然のアカツ林は自然淘汰によってよく成長しているところがある』として、『人工的に植栽した森林の手入れが必要である』と述べられている。また、『林床にササが繁茂していることが春先の山火事の誘引となり、肥料分を奪い、樹木の生長を悪くしている原因ではないか』と記されている。

このように明治時代末期に終了した第一期の砂防植林の後には、山火事などで枯れた樹木の補植を行う程度の手入れのみが行なわれていたことがうかがわれる。

昭和14年度からは、昭和13年（1938年）の阪神大水害の災害復旧のために7年計画で災害防備林造成事業がはじ



まった。13年度から17年度までの5年間の造林面積は371haと記録され、また前年度の植栽本数の2割程度が補植されている。しかし、都市部での造林であることと戦時色が濃くなるなかで林業労働力の不足や作業従事者の技能低下もあり、昭和16年（1941年）頃からは育林作業ができないところも出てきた。この時期が明治末期に次ぐ第二期の植林期といえる。

一方、昭和13年（1938年）頃から『松樹害虫の食害による被害蔓延の兆しあり（中略）全林の存亡を危うくするに至れり』と松枯れ被害の拡大と被害を防ぐ作業の実施、市民への広報を行なったことが記されている。昭和14年度から17年度の4年間の市有山林での松枯れの被害面積は延べ1,891ha、被害本数22,981本にのぼった。また、明治期の植林でマツ林になっている場所には、マツの間伐を行

い、カシ、シイ、モミ、ヒノキなどを植え、将来は針葉樹と広葉樹が混じりあった森林に導くことを目指していた。

このような時期に、紀元2600年記念事業として明治44年（1911年）と45年（1912年）に砂防植栽が施工された区域に、わが国で最初の樹木園として森林植物園を整備することになり、昭和15年（1940年）2月に起工式を行なった。太平洋戦争中何度も不急事業ということで予算削減を迫られながらも関係者の理解と努力の下で事業を継続し、昭和32年（1957年）に再度ドライブウェイが有料道路として森林植物園まで開通したのを機に開園。わが国の植物園としてはもっとも広い131.3haの園内に昭和59年（1984年）には森林展示館を開設、六甲の自然や緑化、レクリエーション利用などが一目で分かる展示解説を行なっている。



- 1 昭和15～16年分造林地（昭和31年3月）
- 2 昭和13年頃の砂防植林工事は、熟練作業員たちによって手作業で行なわれていた
- 3 昭和17年度造林地のヒノキ（昭和27年10月）
- 4 昭和20年、マツの下木にヒノキを植栽、ヒノキ育成のためマツを伐採して薪を製造（昭和27年11月）
- 5 山本吉之助（阪神大水害の復旧や森林植物園の整備、背山緑化などに熱心に取り組んで、大きな足跡を残した。神戸空襲に際して、本多博士の残した明治時代の植林現場の写真を抱いて、避難したといわれ、当時のようすを今日に伝えることができた。王子動物園園長などを歴任。ブナを育てる会など、退職後も多大な社会貢献が伝えられている。）
- 6 森林植物園の紅葉（平成13年11月）
- 7 森林植物園の森林展示館

4 戦後復興と緑化

観光の復興と国立公園編入

第二次世界大戦によって神戸市街地は焦土と化し、再度公園や神戸ゴルフ倶楽部なども進駐軍の管理下におかれた。

しかし、はやくも昭和22年（1947年）にはテント村が再開され、翌23年には六甲観光交通委員会が結成されている。昭和25年当時、戦火で家を失い山上に住居を求めた人もあったが、『現在446戸、620世帯、2,156の人が住んでいる。（中略）山上で育てている300人近い子供たちのため、小さな外国人の教会を借りてささやかな学校が開かれていたが、ことしから（中略）新校舎へうつり、200人余りの小学生が雀のように毎日森の学校へさえずりにくる。』茶店は廃業したものもあり13軒程度だったと北尾鏡之助の資料にある。

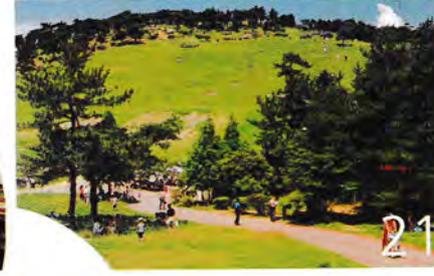
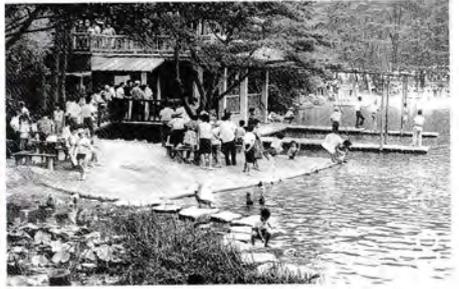
昭和27年（1952年）になると新池スケート場や六甲山牧場が開設され、神戸ゴルフ倶楽部が再開し、昭和30年（1955年）には奥摩耶ロープウェーが開業するなど次第に六甲山に観光の灯が再び点りはじめた。

そんな状況の中で六甲国立公園指定促進連盟が働きかけていた努力が実り、昭和31年（1956年）5月10日、六甲山地区として瀬戸内海国立公園の一部に編入された。これにより六甲山の自然の保全と適正な利用が自然公園法のもとですすめられることになった。

その後も回る十国展望台、凌霄台周辺の整備、芦有道路、六甲山人工スキー場、六甲スカイヴィラ、神戸摩耶ロッジ、六甲有馬ロープウェー、六甲山自然保護センター、オルゴール館などなど時代の移り変わりとともに様々な観光施設が誕生している。



- 1 再度公園は格好の遠足地となった（昭和31年頃）
- 2 六甲山に点在する池でスケートを楽しむ人々（昭和31年頃）
- 3 昭和31年頃（1956年）再建・復活した表六甲ドライブウェイにて
- 4 六甲ケーブル山上駅（昭和36年）
- 5 表六甲ドライブウェイではエンジンを冷やす車が目立っている（昭和38年6月）
- 6・7 市が原の川原でくつろぐ人々（左が昭和39年、右が現在）
- 8 再度公園修法が原の夏のボートハウスの盛況（昭和39年8月）
- 9・10 再度公園でボートを楽しむ人々（左が昭和37年、右が現在）
- 11 再度ドライブウェイから布引貯水池、布引ゴルフ場を望む（昭和37年7月）
- 12 神戸市少年団耐寒集中登山の開会式の様子（昭和46年2月）
- 13 現在も行なわれている耐寒登山（平成14年2月）
- 14 現在の再度公園（平成13年11月）
- 15 40～50cmの雪が積もった修法が原（昭和43年12月）
- 16 堡壘・西稜の岩登り（昭和53年）
- 17 氷がはった七曲滝（昭和57年）
- 18 六甲山全山縦走市民大会（須磨アルプス）
- 19 六甲山牧場
- 20 ホール・オブ・ホールズ六甲（オルゴール館）
- 21 六甲カンツリーハウス
- 22 山上リゾート施設（平成元年）



しかし、国立公園六甲山の特色は大都市から至近距離にある利便性と優れた眺望、大都市圏に残された貴重な自然にあり、過去に失敗した轍^{てつ}を踏むことなく緑の保全と防災を第一に優れた風致景観の創造と時代の要請に応じた適正な利用を図ってゆく必要がある。

市民による緑化活動

ア. 六甲を緑にする会

太平洋戦争で焼け野原になった神戸市街地の背後に連なる六甲の山々に市民の浄財を募って植林が行なわれた。

昭和30年（1955年）、阪急百貨店の清水雅社長がNHK「朝の訪問」で六甲の荒廃を嘆き、緑のオアシスにする運動をおこしてみたいと提唱したところ、その翌日から寄付金が続々届けられ、これが機縁となって当初5カ年計画で

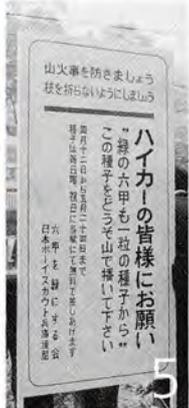
会が発足したといわれている。法人や個人会員からの会費や十円募金などで集まった浄財を神戸市などに寄託して植林を行う一方、宝塚音楽学校の女生徒やボーイスカウトが毎年4月から5月の祝祭日に阪急六甲、芦屋川、仁川の各駅で種子を配布して六甲山への播種をお願いしたり、記念植樹を行なった。

イ. 六甲山緑化基金協会

「六甲山の緑化は、まず、地元のわれわれが…」との思いが、国立公園六甲山地区環境保全要綱の緑化協力事業としてはじめられた。これは、六甲山地区内にホテル、山荘などを建設する場合、総工事費の1%を緑化修景費にあて、自己敷地内に植栽するか、できない場合は緑化協力事業の事務局に寄付して積み立てた資金によって六甲山地区の緑



- 1 まやケーブル
- 2 まやロープウェー
- 3 日本最長の六甲有馬ロープウェー
- 4 布引ハーブ園と新神戸ロープウェー
- 5 布引ハーブ園
- 6 六甲ケーブル
- 7 摩耶山掬星台園地のジェットコースター（昭和30年）



六甲に樹を植えましょう

山を愛する
ハイカーの皆様へ

- 緑の大木も一粒の種子からです
- 手近の山地を三センチ程掘って
- 五カ所に分けて埋めて下さい

この袋の中にはクロマツ、ヤシヤブシ、ニセアカシア等の種子が入っています

枝を折らないようにしましょう
火事をおこさないようにしましょう



- 1 表六甲ドライブウェイでの植林、植林前（昭和30年）
- 2 植林後（昭和31年）
- 3 昭和39年
- 4 現在（昭和60年）の六甲トンネル付近
- 5 「六甲を緑にする会」の立て看板（昭和38年）
- 6 ボイスカウトによる種子配布（昭和38年4～5月）

- 7 クロマツ、ヤシヤブシ、ニセアカシアなどの種子を入れてボイスカウトが配った種子配布袋（昭和38年4～5月）
- 8 高取山での、登山会管理委託による清掃（昭和41年9月）
- 9 ブナの苗木を植える人々（平成14年3月）

化を推進することになった。

その後、息の長い円滑な活動を続けるために昭和53年(1978年)「六甲山緑化基金協会」を設立して登山者や市民の寄付をひろく呼びかけ、積立金をさらに増額させてこれを基金に毎年の利息を全額六甲山地区の緑化にあてている。この基金で六甲山緑化100周年にあたり記念碑台地区などで記念植樹も行なわれた。

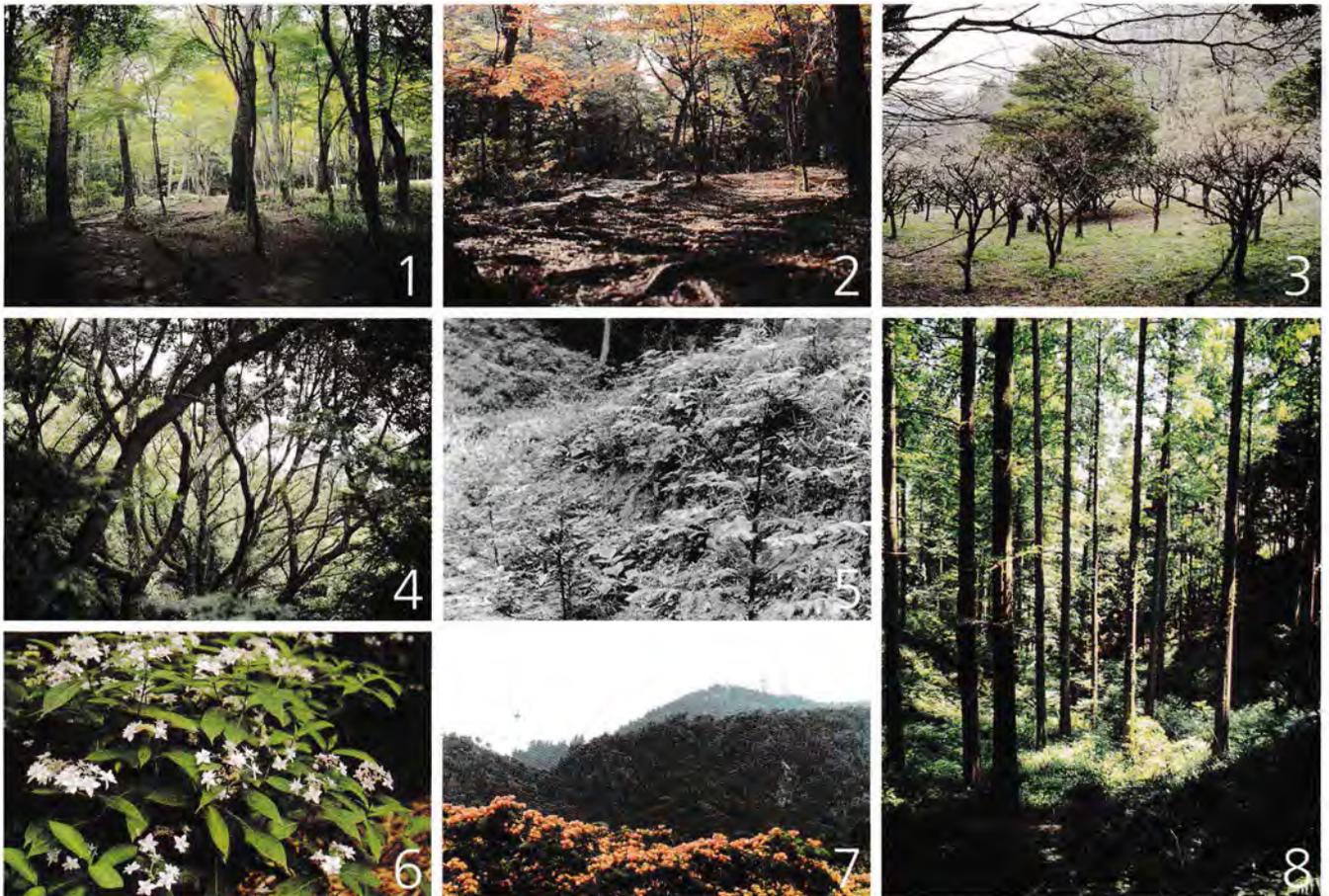
ウ. アジサイの植栽

六甲山自治会と六甲山町内会など六甲山上の関係者が六甲山の緑化推進と緑の保全を図る目的で神戸市民の花アジサイを散策路沿いなどに植栽してきたが、昭和52年(1977年)神戸市市民公園条例に基づく市民協定によって神戸市の助成が受けられるようになり、さらに積極的にアジサイ

の植栽と手入れを続けている。数万本にのぼるアジサイが山上の道路沿いを飾り、訪れる観光客やハイカーの目を楽しませている。

エ. 登山会による植樹

神戸では背山登山の黎明期から市民の手で主として登山道沿いの植樹が行なわれてきた。今も毎日登山を行なっている登山会や六甲全縦市民の会などがその伝統を受け継いで修景樹や防火樹の植樹を行なっている。その本数は、最近20年間で約2万本近くに達している。また、昭和55年(1980年)に登山愛好家によって結成された「ブナを植える会」は、但馬の山々でブナの植栽を続ける一方、六甲山頂部にわずかに残るブナやイヌブナの林を残そうと、六甲産のブナの種子から育てた苗を植える活動も続けている。



1・2 仙人谷の新緑と紅葉

3 保久良梅林(平成14年3月)

4 太子の森(平成13年)

5 昭和34年に二本松林道沿いに植林された頃のメタセコイアの苗木のようす

6 シチダンカ(見ごろは5月下旬~6月中旬)。幕末にシーボルトが紹介して

以来「幻の花」と呼ばれて探していたものが昭和34年に六甲山で発見された。今では森林植物園などで見ることができる

7 ネムノキ(花は6~7月)。ハイキングコース沿いや山麓の各所で見られる

8 平成14年春に間伐手入れをしたメタセコイア林

9 マヤラン(花は6~8月、高さ15~20cm)。摩耶山で最初に発見された

オ. その他の市民活動

平成7年（1995年）1月17日の阪神淡路大震災を機にマスタマキコがはじめた「ドングリネット神戸」や再度山を拠点に活動を続ける「こうべ森の小学校」など様々な緑化市民活動がはじまった。緑化を媒体として多くの人々のネットワークがひろがる。今後も新しいタイプの市民活動が生まれ、企業や行政と手を携えながら六甲山を拠点に緑化の輪をひろげてゆくことと思われる。

緑化の継承

昭和36年（1961年）4月の「市営林の概要」によると、市有山林の過去5年間の造林面積77.21haに174,866本の植栽が行なわれ植栽樹種はスギ、ヒノキ、シラカシ、ヤマザクラ、モミ、ツガ、クヌギ、ホオノキなど31種類におよん

でいる。これには砂防植林は含まないと欄外に記載されている。一方山火事による5年間の被害面積は87.7haと植林面積よりも広く、防火線延長は21,310m防火樹帯は365,040m²と六甲の緑化が山火事との戦いだった一面をうかがわせている。

昭和30年代の高度経済成長期に入り、生活様式の変化は人々の六甲山へのかかわり方からいわゆる里山的な利用を一掃した。マツが優占していた高木層からマツは次第に姿を消してゆく。現在松枯れの主要原因とされているマツノザイセンチュウ病は昭和46年に解明された。松枯れは全国的には昭和10年代後半から大発生し、20年代半ばには被害量が減少した。しかし40年代に入り再び被害量が拡大する。古来、日本人の生活と不離の関係にあり、わが国を代表する風景を構成している「松のある風景」を守るた



10 イノシシの親子

11 キツネ

12 テン

13 タヌキ

14 昭和24年度植栽地平野谷スギの育成状況

15 再度山のモミ林（昭和28年10月）

16 再度山シラカシの苗畑（昭和28年10月）

17 天王・皇后の行事と全国植樹祭が、神戸市垂水区小東山で行なわれた記念碑（昭和29年4月）

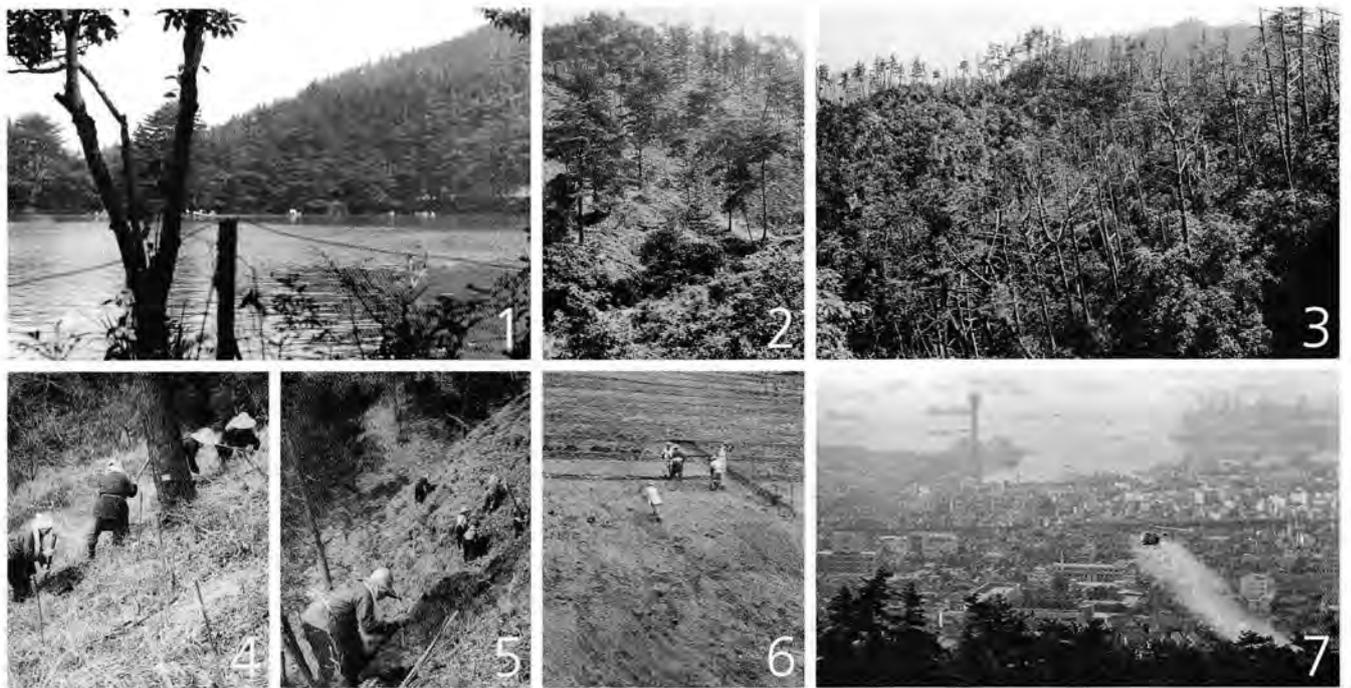
18 昭和天皇が植樹祭でマツの種子をまかれているところ

めに六甲山系においても薬剤散布や被害木の伐倒などを行なっている。そして被害の拡大を防ぐ一方、松枯れ被害地の緑化を進めるために様々な補助や融資制度を利用して、昭和41年（1966年）から森林改造事業がはじまった。明治期の第1期造林、阪神大水害後の第2期造林に引き続き第3の造林期といえる。

しかし、当時は国のいわゆる有用造林木の植栽地を拡大する政策のもとで補助や融資の対象はスギ、ヒノキなど主として建築材などとして利用できる樹種に限られていた。神戸市では、明治以来六甲山地の植林は防災、風致的な観点から樹種の選択を行なうことを原則としている。この時期のスギ、ヒノキなどに偏った樹種選択を補うために市独自の事業としてヤマザクラやヤマモミジなど花や紅葉が美しい樹木を植栽する一方、関係行政機関や融資元に働きか

けてスギ、ヒノキに加えて本来このあたりの安定した森林を構成するカシ類を3割混植することを認めてもらった。その後、昭和50年代半ばを過ぎる頃から国の森林政策に変化が見られ、今はかなり自由に樹種の選択が行なえるようになっている。現在はこれらの林業制度を利用しながら、大面積に植えたスギ、ヒノキの林の間伐を行なってその林の中に広葉樹を植栽し、針葉樹と広葉樹が混じり合った四季を通じて美しい森、明るい林内でレクリエーションなどが楽しめる森を目指して森を育てている。

多様で安定した豊かな森を実現するためには日常生活時間のものさしでは測れない長い年月が必要である。それは山火事、土砂災害、病虫害などとの戦いの年月でもある。そこで計画的な植林を行なうために5年ごとに10年間の森林の計画がたてられる。樹木の生長と日常生活時間の時



- 1 再度公園から見た再度山北斜面の松林（昭和30年代）
- 2 昭和37年の九番山（中一里山）造林地状況
- 3 植物園付近の松枯れの被害（昭和44年5月）
- 4 天王谷の植林（昭和40年）
- 5 天神谷一帯の地ごしらえ（昭和41年）
- 6 再度ドライブウェイ沿いの二番山（治山工事積み苗工施工中、昭和37年）
- 7 マツクイムシ薬剤空中散布（昭和40年7月）
- 8 神戸市グリーン作戦5周年保久良梅林植樹祭（昭和50年4月5日）。左から当時の宮崎神戸市長、クイーン神戸（49年度）、保久良神社氏子代表
- 9 再度公園の松林（平成13年）
- 10 外国人墓地で行なわれたマツクイムシ薬剤散布（昭和49年6月）
- 11 近畿自然歩道に石階段を設置（昭和59年）
- 12 菊水山の草刈作業（昭和59年）
- 13 間伐作業（平成8年12月）
- 14 枝打ち作業（平成7年3月）
- 15 間伐材を利用し、王子動物園のチンパンジーの見晴台を組み立てる（平成13年）
- 16 分水嶺越林道に防火水槽をすえつける（平成14年）
- 17 ひよどり展望公園ハイキングコースのベンチ設置（平成13年）



差のすりあわせを行ない、時代の要請に応じながら樹木の生長時間にあわせた作業を連綿と続けることが、先人達が築いてくれた緑の遺産を継承することに通じる。

永久植生保存地

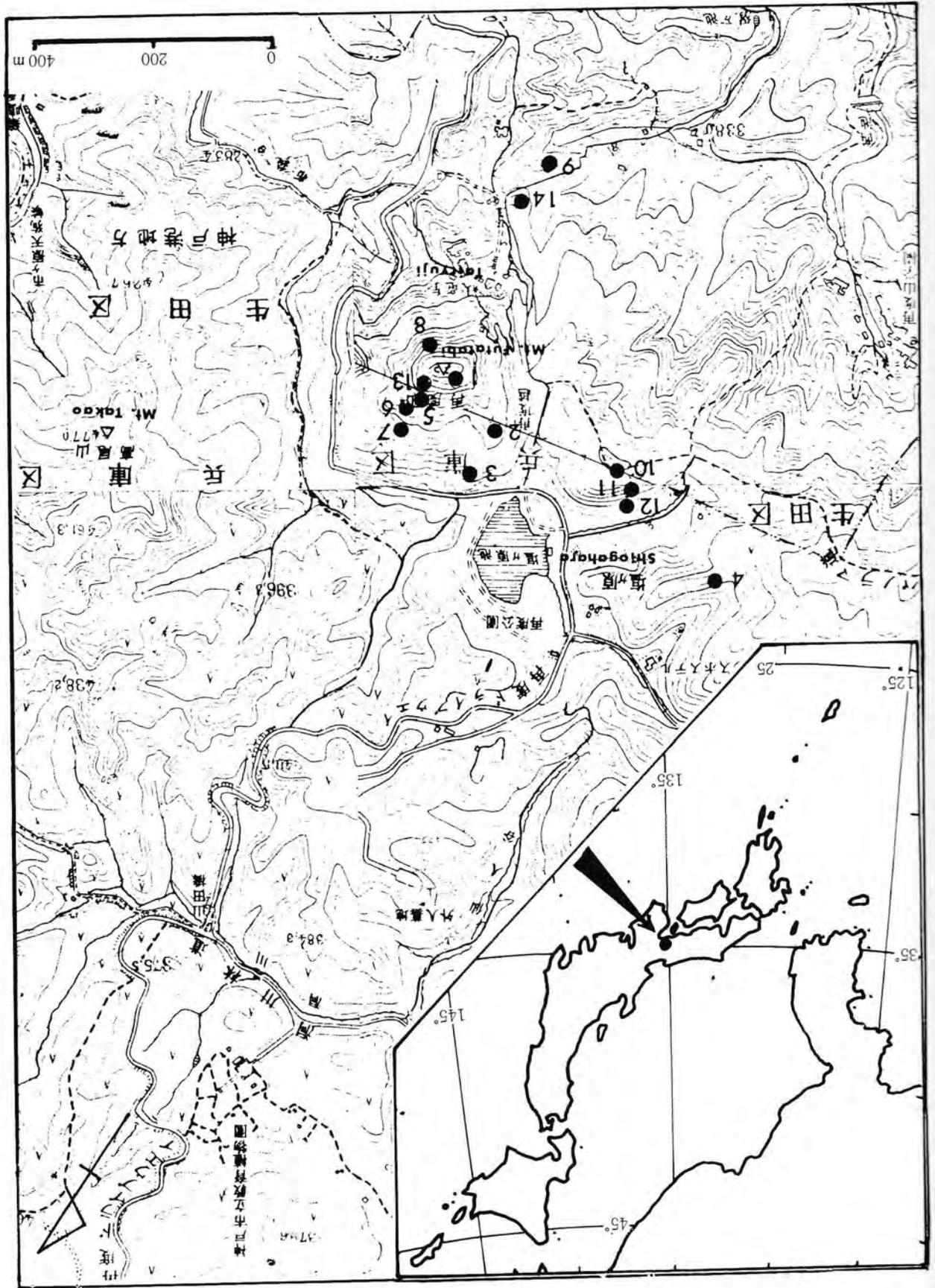
昭和49年（1974年）に国際植生学会が日本で開催され、参加者の見学会が明治後期に植林が始められた再度山と森林植物園で行なわれた。再度山は南面に自然に成立するこの地方特有の森林があり、北面に人工的に緑を復元した林があることからここが見学の場所として選ばれた。当時西ドイツの植生研究所所長で世界的な植物生態学の権威であったチュクセン教授から「植栽した樹種と本数、面積などが記録され、禿山から緑が復元してゆく様子が写真で残されているのは貴重である。植生の変遷を観察する場所とし

て保存することを考えてみてはどうか」という提案があった。神戸市では、早速この再度山の一角（約30ha）を六甲山の自然回復の歴史の記録地区として、さらに私たちの六甲山の自然を守る願いの象徴として「再度山永久植生保存地」とした。

この明治中期の植林によって緑を取り戻した森林の移り変わりは、神戸大学の故・中西哲教授、故・高橋竹彦教授など神戸大学のグループに委託して調査を行ない、その後も5年毎に調査を継続している。

- 1 再度山永久植生保存地調査のようす（平成11年）
- 2 国際植生学会日本大会の現地見学会（昭和49年）
- 3 再度山永久植生保存地調査地点





5 これからの六甲山100年

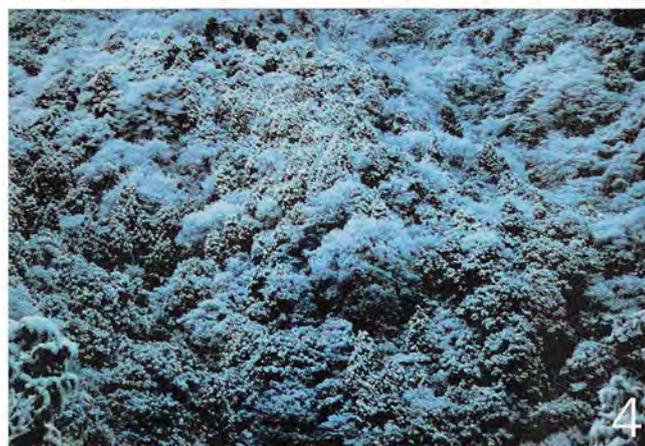
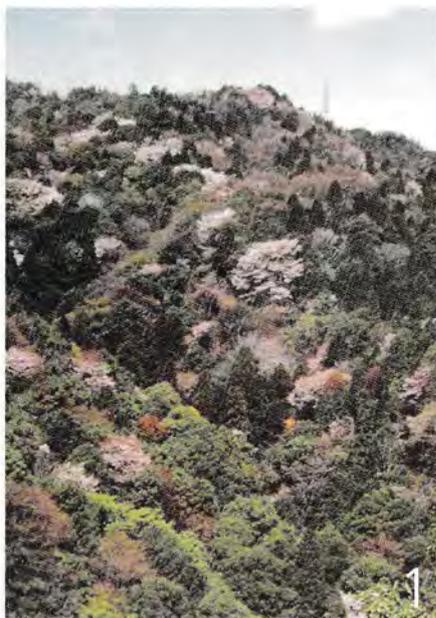
緑化100周年を迎えた六甲山を「神戸の肺」と位置づけて今後、利用する区域と保全する区域のメリハリをつけた森づくりをすすめ、過去100年の緑の成果を次代に継承する。

市民懇話会提言

六甲山緑化100周年を記念して六甲山に関わっている各種団体の代表や市民からなる市民懇話会を設置して、自然環境の保全やレクリエーション利用について様々な角度から、これからの六甲山のあり方について議論が行なわれた。その議論がまとめられて「これからの100年を視野に入れた六甲山の保全と利用について」として市長に提言された。この提言を活かしながらこれからの森づくりのすすめ方を考えてゆくことになる。

【提言の趣旨】

- ①過去100年の取り組みを見つめ直し、これからの100年に向けた長期的な視野をもつ。
- ②市民生活と密接に関わる「ふるさとの山」として六甲山の緑を育て、次代に継承してゆく。
- ③自然と人との共存を目指し保全と利用のメリハリをつけて六甲山の緑化活動を発展させる。
- ④人の手によって継続的に森林を育成し、量から質への転換によって質の高い森づくりを行なう。
- ⑤市民、企業、行政が連携しながら、継続的で裾野の広いネットワークづくりを目指す取り組みを行なう。
- ⑥自然や環境や人に関する学習の場所として活用を図る。



- 1・2・3・4 再度谷の春夏秋冬
- 5 どんぐりを拾う子供たち
- 6 こうべ森の小学校で、除伐をする子供
- 7 こうべ森の小学校バームクーヘンづくり
- 8 森林植物園で自然観察クイズを楽しむ親子（平成14年）

質の高い森林をめざして

明治期の植林開始以来、山を緑で覆うことに重点をおいて緑化をすすめてきたが、様々な樹種で構成される多様で安定した質の高い森をめざして今後の緑化をすすめる。例えば、

- ①早期緑化を目指して植栽されたニセアカシア林の樹種転換をすすめ、本来この地方の森林を構成する樹種を植栽する。
- ②「わがまち、を見下ろす展望拠点の森づくり」を重点的にすすめる。
- ③登山道沿いや市街地から見える場所に四季の変化が感じられる森づくりをすすめる。
- ④六甲の特色を生かした森づくりをめざして、自生種を守り貴重な森の保全と育成をすすめる。

【これからの100年に向けた六甲山緑化の基本的な考え方】

- ①六甲山を「都市林こうべの森」と位置づけ、神戸市民との日常的な関わりあいを育む。
- ②ゾーニングを行い、保全と利用のメリハリをつけて六甲山の緑化に取り組む。
- ③継続的に森林の育成を行い、質の高い森づくりを行なう。
- ④市民・企業・行政が連携し、継続的で裾野の広い取り組みを行なうための仕組みを整える。
- ⑤六甲山の緑を総合学習や生涯学習などの場として利用し、六甲山の自然や環境に関する市民意識のより一層の向上を図るとともに、市民の参画と協働を促す。

市民の参画と協働

ふるさとの森「六甲山」としてこれからの100年も市民と



企業、行政が役割分担をしながら協働で森づくりをすすめるために次のような仕組みづくりをすすめたい。

- ①環境教育、自然観察など森を利用する活動への市民の参画。
- ②森林レクリエーション活動の促進。
- ③森を育てる作業への市民の参画。
- ④高度な森林技術をもった市民を養成する場を提供する。
- ⑤六甲山にかかわる市民ネットワークの構築をすすめる。
- ⑥人生の節目に植樹ができる「市民記念の森、づくりを検討する。
- ⑦私有山林の所有者と市民ボランティアの橋渡しなどをして市民の森づくりの場をひろげる。

六甲山系グリーンベルト

阪神淡路大震災後、六甲山系山麓部の防災機能を強化するために国土交通省がグリーンベルト構想を提唱した。これは、六甲山系南部の市街地に面した山麓斜面一帯（面積約8,400ha）を防災機能の高い緑地帯として保全・整備することによって、土砂災害の発生を抑えるとともに、上流からの土砂の流出を防止し、災害に強いまちづくりをすすめようとするものである。兵庫県と神戸市では震災復興計画に位置づけて平成7年度から国、県、市で六甲山系グリーンベルト整備事業に取り組んでいる。

事業の目標

- ①土砂災害の防止
- ②良好な都市環境、風致景観、生態系および種の多様性の



保全・育成

③都市のスプロール化の防止

④健全なレクリエーションの場の提供

